



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語の冠詞の教育内容構成の課題 : 英語教育における名詞句の構造と機能の指導の体系化を目指して
Author(s)	町田, 佳世子
Citation	教授学の探究, 14, 73-106
Issue Date	1997-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/13601">https://hdl.handle.net/2115/13601</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_p73-106.pdf



# 英語の冠詞の教育内容構成の課題

～英語教育における名詞句の構造と機能の指導の体系化を目指して～

町 田 佳 世 子

(北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程)

はじめに

## 1. 冠詞指導の意義と課題

### 1.1 冠詞指導の意義

- 1.1.1 「冠詞など使わなくても意味は通じる」の本当の意味
- 1.1.2 名詞の定性を決定する冠詞
- 1.1.3 指示対象が数量的かカテゴリー的かを示す機能
- 1.1.4 Count / mass の区別の指導に関連する冠詞指導の意義

### 1.2 冠詞の教育内容構成の課題

## 2. 教育内容構成の基礎としての冠詞に関する言語学的研究の検討

### 2.1 冠詞の体系の構成要素

- 2.1.1 いくつかの冠詞研究における冠詞の体系の構成要素
- 2.1.2 教育内容としての冠詞の体系の構成要素

### 2.2 冠詞の体系の構造の3つの次元

#### 2.2.1 定性：語用論的集合の存在と包括性

- 2.2.1.1 Hawkins (1978) による定冠詞・不定冠詞の意味論的・語用論的特性
- 2.2.1.2 Hawkins (1991) による定冠詞・不定冠詞の意味論的・語用論的特性
- 2.2.1.3 Chesterman (1991) による5つの冠詞の分析
- 2.2.1.4 包括性と語用論的集合への位置づけ可能性という素性から構成される定性

#### 2.2.2 カテゴリー的な指示と数量的指示

#### 2.2.3 名詞の count use / mass use の標示としての冠詞

おわりに

参考文献

はじめに

外国語教育の目的を、その言語に属する文を限りなく生成し、属しない文は生成しない能力と、発話の場面に最も適切な文をその無限の文の集合の中から選択する能力を形成することとすると(大竹 1988, 1989)、外国語教育、本稿では特に英語教育を扱うので、英語教育における教育内容には、文の主要な構成要素である名詞句の構造と機能の指導が含まれる。名詞句の重要な機能のひとつに指示作用がある。指示作用とは、ある言語表現と言語外の世界の存在物との結びつきであり、指示作用によって私たちは現実の世界の様々な存在物を言語を使って表現することができる。それぞれの名詞句の指示作用はその名詞句の形式(構造)に対応しているので、英語を使って現実の世界に言及しようとするれば、どのような形式(構造)をもつ名詞句がどのような指示作用を行っているのかを知る必要がある。従って英語学習者に形成されるべ

き言語の知識の中には、英語の名詞句の構造とその指示作用に関する知識が含まれていることになる。名詞句の指示作用を教育内容に取り込むためには、指示作用を決定する要因が何であるか、そしてそれらの要因の形式的・意味論的・語用論的特性を明らかにする必要がある。英語学習者が、ある英語の名詞句を聞いたり読んだりするとき、それがどのような指示対象をもっているのかを理解し、またある状況で適切な名詞句を使用することができるようになるよう教育内容および指導過程を確定していく作業の中で、本稿では特に冠詞の教育内容に関する課題を取り上げたい。

## 1. 冠詞指導の意義と課題

### 1.1. 冠詞指導の意義

名詞句の内部構造で限定詞 (determiners) の位置にくる要素が名詞句の指示作用に関与することは、多くの文献で取り上げられている。名詞句の指示作用のどのような側面を決定するかによって限定詞を下位分類することができ、例えば、名詞句の指示対象が離散的個体か連続体かという側面に注目して分類することもできるし (Huddleston 1984 : 245-6)、名詞句の指示対象が単数か複数かという側面に注目して分類することもできる (Huddleston 1984 : 240)。Lyons (1977) は、限定詞を、指示する個体集合の大きさ・量を確定する数量詞と名詞句を定か不定に確定する決定詞に分類する。これらのことからひとつの名詞句の指示作用はいくつかの側面をもち、それらの側面がくみ合わさることによって対象への指示が決定されていることがわかる。

(1)は MELON という語彙素がとる形式のいくつかを示している。

- (1) a. I bought a melon.  
b. I bought some melon.  
c. I bought some melons.  
d. I bought the melon.  
e. I bought the melons.  
f. I bought melons, not lemons.  
g. I bought dried melon, not dried banana.

(1)a. ~ g. のそれぞれの形式は次のような指示対象をもっている。(1)a. は聞き手にとって話し手がどれをさしているのかはわからないけれど、とにかく丸ごと1個のメロン、(1)b. は聞き手にとって話し手がどれをさしているのかはわからないけれど、とにかくメロンの何切れか、(1)c. は聞き手にとって話し手がどれをさしているのかはわからないけれど、とにかく丸ごと何個かのメロン、(1)d. は話し手と聞き手が両方ともそれと知っている丸ごと1個のメロン、もしくは1切れのメロン、(1)e. は話し手と聞き手が両方ともそれと知っている丸ごと何個かのメロン、(1)f. は丸ごとメロンというものの全体、(1)g. は (乾燥させた) 切ったメロンというものの全体が指示されている。

---

<sup>1</sup>本稿では語彙素を小型大文字を使って表す。

これらの散文的な表現をまとめると、(1)のそれぞれの形式は4つの対立、すなわち指示対象が複数かそうではないか、離散的個体 (discrete individuals) かかたまり (mass) か、話し手と聞き手にとって指示対象が定 (definite) か不定 (indefinite) か、カテゴリー全体かその中のいくつかの要素かという点で異なっており、これらの4つの対立がすべて関与して名詞句全体の指示を決定している。そしてその決定の結果を *a*, *the*, *some*, そして音形のない要素が標示しているのである。そのうち数の対立についてはこれらの要素による標示だけでなく名詞そのものの形態によっても標示されると考えることができるので、残り3つの対立が上で述べた *a*, *the*, *some*, そして音形のない要素によって標示されると考えることができるだろう。

本稿では、名詞句の指示作用に関する知識を英語学習者に形成するために、限定詞の中で冠詞を取り上げ、その意味や機能を指導する教育内容がどのようなものであるべきかを検討していく。冠詞を対象とする理由は、他の限定詞と異なり冠詞が指示作用の3つの対立すべてに関与し、対立の結果を標示していることにある。すなわち冠詞の意味や機能を理解するということは名詞句の指示作用を理解することに他ならない。以下では名詞句の指示作用における3つの対立に冠詞がどのように関与しているかをもう少し具体的にみていくことにする。

### 1.1.1 「冠詞など使わなくても意味が通じる」の本当の意味

英語を学習する際、冠詞は音形的にはとても小さな単位なので、冠詞など使わなくても意味は通じると考える人もいるだろう。その場合の「意味」をどう定義するかという問題は本稿では論じないが、英語のやっかいなところは「冠詞など使わない」ということがすでに「冠詞を使っている」ことになっていることである。例えば、「冠詞など使わなくても意味は通じる」と考えて、(2)では「カンガルーが好きだ」、(3)では「みみずはきらいだ」という意味を伝えようとして次のように言ったとしよう。

(2) I like kangaroo.

(3) I hate earthworm.

ところが、実際は何も冠詞を使わなかったことによって、(2)では「カンガルーの肉が好きだ」、(3)では「みみずの肉はきらいだ」という意味を伝えたことになっている。つまり、*kangaroo*, *earthworm* の前に冠詞をつけないということは、「何もつけない」という冠詞に関連する選択肢のひとつを選択し、ある特定の指示作用を行うことに他ならない。冠詞などつけなくても意味は通じるという理由で何もつけないと、たしかに意味は通じたのだがその通じた意味は意図した意味とは異なってしまうことになる。前後の文脈があれば、相手はちゃんと意図した意味を想像してくれると考える人もいるだろう。しかし例えば、(2)が使われたのが、次のような会話でだったらどうだろうか。

(4) A : So you're off to Australia soon?

B : Yeah, I can't wait.

A : Why did you choose Australia?

B : I got this great package deal - all meals included. I'm looking forward to a big steak.

Also *I like kangaroo and crocodile.*

A : Oh, do you?

B : Yeah, I like animals.

A は、B が動物の肉ではなく、動物そのものを話題にしていることを理解できるだろうか。もし *I like kangaroo* が文法的に不適切な文であれば、外国語を話す際の間違いとわかって A は B に聞き返すなどして確認するだろう。しかし、*I like kangaroo* が文法的に正しい文であるため、お互いの誤解は当面正されないままになる。

これらの例は、*the* や *a* などの冠詞が名詞の前に存在している場合だけでなく、実際に音形として存在していなくても何か要素が名詞の前にあって、それが *the* や *a* がある場合とは異なった指示作用をしていることを示している。ここでは *kangaroo*, *crocodile* が動物としての個体を指示するのではなく、その動物の中身である肉を指示していると解釈されているのである。英語の名詞句がどのような存在物を指し示しているかに関して、音形のない要素も含めて冠詞が重要な役割を果たしていることがわかるであろう。

### 1.1.2 名詞句の定性を決定する冠詞

次の2つの例を比べてみよう。

(5) I bought some eggs and apples. The eggs were cheap but the apples were expensive.

(6) I bought some eggs and apples. Eggs were cheap but apples were expensive.

(5)の *the eggs*, *the apples* の指示対象が「私が買ったたまごとリンゴ」であるのに対し、(6)の *eggs*, *apples* の指示対象は直前の文で述べている「私が買ったたまごとリンゴ」ではない。一般的に「たまごというもの」「リンゴというもの」と言っているだけである。また、

(7) I bought *a book* and a magazine yesterday and read *a book* this morning.

では、「きのう買った本」と「けさ読んだ本」は別の本であると解釈され、もしきのう買った本をけさ読んだのなら、

(8) I bought *a book* and a magazine yesterday and read *the book* this morning.

としなければならない。名詞の前にある要素が *the* か *a*, *some* か音形のない要素かによって、話し手と聞き手が会話の流れや状況によって共に知っている「たまご・リンゴ・本」を指し示すのか、そうではない「たまご・リンゴ・本」を指し示すのかという違いが生じる。そのような違いを定性の対立、すなわち定 (definite) か不定 (indefinite) かの違いとすれば、冠詞は定か不定かの違いを標示していることになる。

### 1.1.3 指示対象が数量的かカテゴリ的かを示す機能

英語学習者によく見られる間違いのひとつに次のようなものがある。

(9) A : I hear that you went to New York. What did you do there?

B : I visited a museum and ? restaurants.

ここでは *restaurants* ではなく *some restaurants* の方が適格であるが、それは *restaurants* という名詞句は単に「レストランというもの」、すなわち「レストラン」というカテゴリーを指示していて、Bが行ったであろう現実の何軒かのレストランを指示してはいないからである。一方で *some restaurants* や *a restaurant* では「レストラン」というカテゴリーの中の個々のメンバーのいくつかという数量的な意味あいが見られることになる。*Restaurants* という名詞句を音形のない冠詞と名詞から構成されていると考えれば、音形のない冠詞はその名詞のカテゴリーそのものが指示されていることを標示し、*some* や *a* はその名詞のカテゴリーに含まれる要素に対して数量的に指示していることを標示すると考えられる。この違いは次の文でも現れる。

(10) Joe's been chasing women/some women since he was young.

(ジョーは若いときから女性達を/ある女性達を追いかけ回している。)

このような指示対象の範囲の違いについては 2.2.2 で詳しく述べることにする。

#### 1.1.4. Count/mass の区別の指導に関連する冠詞指導の意義<sup>2</sup>

英語の名詞はあらかじめ数えられる名詞と数えられない名詞に分類されるのではなく、どのような限定詞と共起しているかによって、その名詞が count として使用されているのか mass として使用されているかが判断される (Huddleston 1984 : 245 ff.) という立場をとると、冠詞も限定詞であるので、共起している名詞が count として使用されているか mass として使用されているかを標示していることになる。例えば、上述(1)の例では、

(1) a. I bought a melon.

b. I bought some melon.

*a melon* は count としての解釈をもち、丸ごと一個のメロンを指示し、*some melon* は mass としての解釈、すなわち丸ごと一個のメロンの中身、おそらくこの文脈では切ったり割ったりしたメロンを指示している。

この立場に立って名詞句の意味解釈を指導するならば、大きく2つのことが教えられること

---

<sup>2</sup>Count/mass の区別の指導に関する考察については、拙稿「英語の名詞の可算性とそれに関連する意味論的対立の指導」、北海道大学大学院教育学研究科修士学位論文、1996年を参照。Count と mass について簡単に述べると、count とは離散的な個体であること。例えば *an apple* は恣意的ではない境界をもち他の *an apple* とは区別される離散的な個体であるし、*an idea* は他の *an idea* と区別する境界をもっているという点で count である。Mass とは未分化で連続していること。例えば、*enough water*, *no justice* などは恣意的な境界をもたない未分化な存在物 (entities) であり、*some butter* もその境界は恣意的ではないので mass である。

になるだろう。ひとつは名詞が count として使用されている場合それがどのような言語外の世界の存在物と結びついているのか、mass として使用された場合はどのような存在物を指し示しているのか、それぞれの存在物の様態を区別する根本的な特徴は何かを教えることである。例えば上の *a melon* と *some melon* の場合、前者が離散的個体としてのメロン、後者がいかようにも境界をかえることのできる質料としてのメロンであるというような違いを教えることである。それに加えていくつかの一般的意味解釈の規則、例えば、count として使用されることが通常であるような名詞が mass として使用される場合は、もとの形相 (form) のもつ質料 (material) を指示することや、mass として使用されることが通常であるような名詞が count として使用される場合は、その種類やタイプを指示するという規則が教えられるだろう<sup>3</sup>。

もう一つは、名詞の count use, mass use を決定している限定詞の意味を指導することである。限定詞の意味を指導することによって、それらの限定詞と名詞の結合の意味がより理解されるだけでなく、名詞の側の count/mass の区別だけからでは説得力のある説明が与えられない言語現象に、より適切な説明を付与することができる可能性がある。例えば、*by taxi, go to school* の *taxi, school* は、形式からは mass として使用されているのであるが、それが *a melon* (丸ごと1個のメロン) に対する *melon* (その中身であるメロン果肉) のような解釈をもっているのではないことは明らかである。さらにこれらの例は他の mass use された名詞の場合(例えば *I ate some chicken for dinner.* の *chicken* など) と違って *some* など他の限定詞とは絶対共起しないという特徴がある (\**by some taxi, \*go to some school*)。ということは、この用法は count/mass の区別の意味解釈の規則によってではなく、*taxi* や *school* の前にある音形のない要素の意味によってある解釈が与えられたと考える方が実り多いのではないかということが予想される。

冠詞の意味を明らかにしなければ説明が付かないような言語現象に *a knowledge of English, an unusual intelligence, a good education* などがある。これらの名詞 *knowledge, intelligence, education* は *a* と共起することはできるがその他の count use を示す限定詞とは生起しない (\**many knowledges of English, \*two intelligences, \*several educations*)。これらの例についても冠詞 *a* の意味・機能や、音形のない要素の意味を明らかにし、それを指導することによって、より明解な理解が可能になるのではないかと考える。

## 1.2 冠詞の教育内容構成の課題

1.1 で、英語の名詞句の指示作用を指導するにあたって冠詞の指導が重要な役割を果たすことをみてきた。しかし冠詞とは何なのか、冠詞のカテゴリーを構成する要素には何があり、それらがどのような構造によって冠詞の体系を構成しているのかということは、必ずしも自明のことではない。音形はないけれど名詞の前に存在していると仮定する要素は冠詞なのだろうか。もしそれが冠詞だとしても、音もなく目にも見えない要素の存在をどう立証し、どう教えるこ

---

<sup>3</sup>Count の用法が第一義的であるか mass の用法が第一義的であるかは、それぞれの名詞の語彙記載事項として辞書 (the lexicon) に記載されているという立場を本稿ではとっている。例えば、*desk, book* は count の用法が第一義的であり、*water, butter, justice* は mass の用法が第一義的と記載されている。このほか名詞には mass の用法しかもたないもの (*equipment, outskirts* など)、count の用法しかもたないもの (*individual, unit* など) がある。

とができるのか。また *some* は冠詞なのか。もし冠詞だとすれば、

(11) There are 80 students in our department. Some of them are from overseas.

の *some* とはどう違うのかなど、何を冠詞とし何を冠詞に含めないのかを検討しなくてはならない<sup>4</sup>。

その際に留意すべきことは、冠詞としての資格をもつ要素はすべて、1.1 でみた名詞句の指示作用における3つの対立の結果を標示していること、そしてその標示以外に名付けのな意味をもっていたり、名詞句の主要部になるなどの機能はもっていないということである。この観点からどのような要素を冠詞の体系に取り込んで指導していくかを検討しなければならないであろう。

次に、1.1 で述べたように、冠詞は定冠詞と不定冠詞のような2分法だけでなく、count/mass に関して、また数量的かカテゴリー的かに関しても対立し、それらが三次元の構造をもって冠詞の体系を構成していると考えられることができる。従って、単にある冠詞は定冠詞としてこのような意味を持ち、別の冠詞は不定冠詞としてこのような意味を持つという記述だけでは冠詞の意味をすべて記述したことにはならないし、もしその対立だけを教育内容として指導したならば説明のつかない言語事実に直面することが予想される<sup>5</sup>。

さらにそれぞれの対立を本質的に特徴づける概念は何か、その概念に対してどの冠詞がどのような対立をしているのかを明らかにしなければ教育内容の確定はできない。特に定・不定の対立については従来、「定名詞句は話し手と聞き手がそれとわかるもの、同定できるものを指し示している」「指示対象が1つに定まるものには定冠詞を使用する」というような曖昧な表現でしか述べられていないことが多かったが、話し手と聞き手がそれとわかるとはどういうことなのか、1つに定まるとはどういうことなのかを明確にする必要がある。

本稿ではそれぞれの冠詞がとる対立の値を総合したものがその冠詞の意味であると考え、それを教えることが冠詞の指導に不可欠であるとする。そのような指導によれば、これまで「決まったフレーズ」とか例外として扱われてきた現象も統一的に扱うことができるのではないかと考える。したがってここで述べた課題、何が冠詞なのか、またそれぞれの次元の対立の本質は何かを明らかにするため、2節において言語学の領域で冠詞の意味がどのように記述されているかを検討する。

## 2. 教育内容構成の基礎としての冠詞に関する言語学的研究の検討

### 2.1 冠詞の体系の構成要素

#### 2.1.1 いくつかの冠詞研究における冠詞の体系の構成要素

冠詞の体系の外延をどう確定するかにあたって、これまでの主たる冠詞研究においてどのような要素 (items) が冠詞として扱われてきたかをみてみたいと思う。

Quirk *et al.* (1985) がはっきりと冠詞 (articles) という用語で呼んでいるのは不定冠詞 *a*,

<sup>4</sup>冠詞は単独で名詞句を構成できないが、*Some of them* の *some* は名詞句の唯一の構成素となっている。

<sup>5</sup>1.1.3 で取り上げた *some women/women* などとはどちらも不定名詞句だが意味解釈は違っている。

定冠詞 *the*, zero 冠詞の 3 つである (253 ff., 特に 256-7, 265-281)。Zero 冠詞の用法としては、不定冠詞 *a* が共起できない複数名詞・mass 名詞のとき不定冠詞 *a* にかわって使用される (12), 繫辞関係 (copula relation)<sup>6</sup> にある名詞句で「唯一の役割や仕事」の場合 (13), また散発的な指示 (sporadic reference)<sup>7</sup> がすっかり制度化された場合 (14) をあげている (1985 : 274-281)。

- (12) a. Have you ever eaten roasted chestnuts?  
b. Do you like folk music?  
(13) a. Maureen is (the) captain of the team.  
b. John. F. Kennedy was (the) President of the United States in 1961.  
(14) be in bed, go to town, travel by bus, at sunset, before breakfast, day by day, etc.,

また、断定限定詞 (assertive determiner) である強勢のない *some* [sm] が zero 冠詞のかわりに使用されることもある (Quirk *et al.* 1985 : 274)。

- (15) I've just bought a melon/some melons/? melons.

ここで *melons* が文法性に疑いがあり、そのかわりに *some melons* が文法的であるのは、zero 冠詞が「指示される対象物 (objects) のカテゴリー」を示しているのに対し、*some* は「不定ではあるがある特定可能な数量 (specifiable (though indefinite) quantity or amount)」への指示を示しているという違いがあるからであり、このことは、次の例でははっきりとした意味の以外となって現れている (Quirk *et al.* 1985 : 275)。

- (16) Joe's been chasing some women/women since he was young.

このことは Quirk *et al.* (1985) が、*some* と zero 冠詞の間には数量的指示かカテゴリーへの指示かという対立があることを認めていることを示している。Quirk *et al.* は *some* を分類上冠詞というカテゴリーにはくくらなかったが、このような対立関係を認めていること、および冠詞の使用をまとめた表 (P 265 table 5.26) に *some* を加えているということから、定性や数および count/mass の区別への関与について *some* を *a*, *the* そして zero 冠詞と同様に扱っていることがわかる。

Christophersen (1939) では、*the* は familiarity という意味をもつ冠詞、*a* は unity を表す冠詞として扱い、*the* と *a* それぞれが異なった意味をもち相互に対立するのではないと考えた。一方で *some* は、ある名詞が連続体名詞 (continue-word) として生起していることを示す数量

<sup>6</sup> 繫辞関係 (copula relation) の例として、この場合 *She is a teacher*. などの構造を問題にしている。

<sup>7</sup> Quirk *et al.* (1985) は sporadic reference という用語を *the* の用法のところで最初に用いている (1985 : 269)。例えば、*My sister goes to the theatre every month*. の *the theatre* は特定の「劇場」ではなく社会的組織・制度 (institution) としての「劇場」である。「*The theatre* の指示はある制度に対して行われていて、それは時・場所を変えて様々なところに観察されるものである」(1985 : 269) という点で、散発的な指示 (sporadic reference) なのである。

詞として扱われた。Christophersen の冠詞の研究で familiarity の理論と並ぶ「現実化の理論 (the actualization theory of the articles)」においては *the* と *a* がもつ共通性に注目し、いかなる冠詞も、名詞の基礎にある概念を「現実化」し、もはや抽象の中にある概念ではなくしてしまうという意味で、その名詞の意味を変えると述べている。すなわち、*cake* は CAKE の一般的な概念 (general concept) であるのに対し、*a cake*, *the cake* はその概念のある限定された具体例を指示しているという点で、*cake* と対立しているとするのである (Christophersen については Chesterman から引用している。Chesterman 1991 : 15)。この対立は Quirk *et al.* (1985) での強勢のない *some* [sm] のもつ数量的指示の機能と zero 冠詞のもつカテゴリー指示の機能という対立と類似している。

Jespersen (1949) は、familiarity の理論によって、familiarity を 3 つの段階にわけ、それぞれの段階で要求される冠詞を次のように分類する。全く familiarity がない場合は *a* か zero 冠詞 (an apple, he drinks milk every morning, he eats apples every morning), ほぼ完全な familiarity の場合は *the* (an old tailor に続いて the tailor, the King is dead), そして familiarity が完全であればいかなる冠詞も必要とされない (God, forgive us, dinner, go to college, to sea, 固有名など) とした (Jespersen 1949 : 417-418)。

Hawkins (1978, 1991) は *a*, *some*, *the* を冠詞とし *a/some* を不定冠詞, *the* を定冠詞としている (1978 : 11) が、冠詞のカテゴリーがどのような要素からなるかについての論議に基づいた上で冠詞をこの 3 つに限定しているわけではない。Mass nouns や複数名詞と生起する冠詞も統一的に扱うという方針<sup>8</sup>のもとで提示される様々な例文で *some* が使われ、分析の対象となっている。しかしその冠詞としての資格については特に言及しているわけではなく、むしろ言語事実として当然冠詞として扱うのが適当であると考えているように思われる。しかし冠詞としての資格について論じていないと言うことが *some* を不定冠詞として扱う意義を否定することにはならない。言語事実を観察して *some* が mass nouns や複数名詞の場合の *a* の相当語句 (equivalent) という立場をとるのであれば、当然 *some* は冠詞の体系の要素、もしくはそれと同等の文法的地位を持つ要素として扱われなければならないであろう。

一方で Hawkins (1978, 1991) は zero 冠詞については全く言及せず、例文の中にも zero 冠詞を伴っている名詞句はでてこない。総称表現に関するセクションでも分析の対象になっているのは *a* と *the* だけであって、*Lions are noble beasts. Airlines charge too much.* の様な例文を挙げてはいるが、「*Lions* も (*the lion* と同じように) クラスを指示することができる」(Hawkins 1978 : 216) 「*airlines* は不定であり存在するすべてのそして未だ存在していないすべての *airlines* をカバーする」(Hawkins 1978 : 218) と述べているだけで、*lions*, *airlines* が冠詞を伴っていると考えるのかどうかについては言及していない。

Chesterman (1991) は *a*, *some*, zero 冠詞, *the* に加え、null 冠詞という音形がなく固有名や単数可算名詞<sup>9</sup>の前に生起する冠詞を認めている。例えば、*John goes to school by bus.* の

<sup>8</sup>定冠詞 *the* を伴う名詞句は「唯一性」を含意するとした Russell (1905) への批判で、「唯一性」とすると mass nouns や複数名詞と生起している場合が説明できないが、冠詞の意味はどのような名詞と生起しているときでも一貫した意味が与えられるべきとの考えで研究が進められている (Hawkins 1978 : 96 ff.)

<sup>9</sup>Chesterman は名詞が count nouns と mass nouns に分類されるという立場をとっている。

*John, school, bus*などは *I like honey/bees*. の *honey, bees* の前にある音形のない要素とは別の特性を持つ要素が生起していると考え、それを null 冠詞と名付けるのである。従って3つの表層に現れる冠詞と2つの表層には現れない冠詞によって冠詞の体系が形成されているとの立場をとっている(1991: 63)。Some を冠詞の体系に組み入れている理由は、「『典型的な』*a* に対して *some* が完全に complementary な分布をしているということ」<sup>10</sup> と「複合的な数量詞の作用域を含む文脈<sup>11</sup>において *a* と全く同じパターンを呈する」ことを挙げている (Chesterman 1991: 45)。音形のない要素を冠詞に含め、かつその中でも2種類あるとする理由は、zero 冠詞は冠詞の体系に含まれるとした上 (Chesterman 1991: 45) で、もし音形のない冠詞が zero 冠詞だけだとすると次のような問題点がでてくることを指摘する(1991: 46)。例えば、*Fido likes cheese*. という文を考えると、この文には *Fido, cheese* という音形のない冠詞を含む名詞句があるが *Fido* の方が定名詞句であるのに対し *cheese* の方は不定名詞句である<sup>12</sup> もしどちらも同じ音形のない冠詞が生起しているとする、その冠詞は定であり同時に不定でもあるという特性をもつことになるがそれは奇妙なことであろう (Chesterman 1991: 46)。また制限的修飾句 (restrictive modifier) と生起するときの振る舞いも2とおりが観察される。

- (17) People who live in glasshouses...
- (18) Cheese (which is) made of goat's milk is incredibly healthy.
- (19) \*John Smith I used to know once said that...
- (20) A John Smith I used to know once said that...
- (21) \*He spent four years in prison where Fred works.
- (22) He spent four years in the prison where Fred works. (Chesterman 1991: 46-47)

*People, cheese* は制限的修飾句が後置されても非文にならないが、*John Smith, prison* はそのまま制限的修飾句と生起することはできない。このことは *people, cheese* と *John Smith, prison* それぞれが共起している冠詞が異なっていることを示唆している (Chesterman 1991: 46-47)。そして制限的修飾句と共起できるのが zero 冠詞であり、null 冠詞は *John* などの固有名や *prison* などの単数可算名詞と生起する冠詞で、制限的修飾句とは共起できないとい

<sup>10</sup>Complementary な分布をするということは、一方が生起する環境には他方は決して生起しないということである。*A* は count use された単数名詞の前に生起するが、*some* は mass use された単数名詞か複数名詞の前には生起せず、その環境に *a* が生起することは絶対ない。

<sup>11</sup>例えば、*Everyone read a book on caterpillars*. は *everyone* と *a* によって数量に関する2つの作用域が存在していて、どちらの作用域がもう一方の作用域をその内部に包摂しているかによって意味解釈が異なってくるような場合のことである。

<sup>12</sup>ある名詞句が定名詞句か不定名詞句かを判断する場合、所有構造 (the possessive structure) の中でテストするとよい。この構造は主語の位置に定名詞句がくる場合文法的である (Chesterman 1991: 46)。

- (1) *Fido* is *John's*.
- (2) \**Cheese* is *John's*.

(1)は文法的だが(2)は非文法的であるので、*Fido* は定名詞句、*cheese* は不定名詞句であることがわかる。

う特性の違いがあると主張するのである。

どちらも音形をもたないと言う点で形態的には同一である2種類の冠詞の見分け方について Chesterman は、単数固有名 (John, Helsinki) および単数可算名詞 (church, hand in hand, etc) と生起する場合を null 冠詞、不定の複数名詞および mass 名詞 (apples, olive, cheese) と生起する場合を zero 冠詞と分類する (1991: 45) としている。単数可算名詞に null 冠詞が生起しているケースとして Quirk *et al.* (1985: 277-281) のリストにいくつかをつけ加えて(23)の用法を提示している (1991: 55):<sup>13</sup>

- (23) a. be in bed, go to church (人間の生活や社会の制度 (institutions))  
b. go by bus, by post (交通や通信の手段)  
c. at dawn, at night, at sunset (一日の中のある時)  
d. in spring (季節)  
e. Dinner is served (食事)  
f. diabetes, measles (病気)  
g. face to face (並列的な構造)  
h. in turn, out of step (固定した前置詞句)  
i. Come along, boy. Yes, father. (呼びかけ語)  
j. book six, part B (後置修飾の数詞などを伴う構造)  
k. a shred of carpet, a girl of good family  
l. What kind of house? that type of book ('kind of'の文脈で)  
m. play lead guitar, on piano (ある文脈での楽器)

このように単数可算名詞であれば null 冠詞であり、複数可算名詞か mass 名詞であれば zero 冠詞であるという分類は、「可算名詞でもあり mass 名詞でもありうる名詞が単数形式のときだけ (例えば *cake* のような場合) 曖昧な形式として残る」がそれでも zero 冠詞ひとつしか認めない伝統的な分類に比べればよいと述べている (1991: 47)。

その他主要な冠詞研究の中で冠詞の種類についての言及では、Palmer (1939) が「the allogistic indefinite article (本稿でいえば zero 冠詞に相当する) が使われている場合といかなる冠詞も (allogistic であれ他のものであれ) 使用されていない場合を区別する必要がある」(1939: 54) とし、*I like London* と *I like cheese* を例にとっていかなる冠詞も生起していない場合と allogistic article が生起している場合を述べている。これに依拠する形で Yotsukura (1970) も「いかなる冠詞も使用していない場合 (not using any article)」と zero 冠詞を使用している場合を区別している (1970: 74-75, 87)。

このように名詞の前にある要素が音形のない場合については、それを冠詞とするか、それとも全く何も生起していないとみなすのかについて見解が一致しているわけではない。しかし音形のない場合が2とおりあることは共通しているといえる。

<sup>13</sup>この分類は Jespersen (1949) の「完全な familiarity」に分類される項目と重なり合う部分が多い (Jespersen 1949: 417-418)。

## 2.1.2 教育内容としての冠詞の体系の構成要素

冠詞研究の代表的ないくつかを選び、その中でどのような項目が冠詞として分類されてきたかを見てきたが、ここで冠詞指導の教育内容を構成する際に何を冠詞の体系に含めるのかという課題に立ち戻ることにする。何を冠詞というカテゴリーの構成要素とするかについては、1, 2で述べたように、名詞句の指示作用における3つの対立についての結果を標示していること、そしてそれらの標示以外には意味や機能を持っていないということが基準のひとつになるだろう。そうすると *the* と *a* を含むことは特に問題ないと考える。問題なのは強勢のない *some* [sm], zero 冠詞, null 冠詞を冠詞の体系に含めるかどうかということであろう。

本稿では *some* を冠詞の体系に含めて論ずるべきという立場をとる。その理由は、第1に統語論上 *some* の生起する位置が *the*, *a* などと同じ位置を占めていること (Huddleston 1984 : 233, Jackendoff 1977 : 104), 第2に *some* は *a* と同じように数量的な文脈 (quantitative context) で見られるのに対し zero 冠詞はカテゴリー的な文脈 (categorical context) で見られるという, zero 冠詞に対立する共通の性質を持っていること (Chesterman 1991 : 56) があげられる。<sup>14</sup> このことは 2.1.1 で取り上げた例(15)にみられる適格性の有無, (16)にみられる意味の違いが例証している。

(15) I've just bought a melon/some melons/ ? melons.

(16) Joe's been chasing some women/women since he was young.

さらに, zero 冠詞を複数名詞の場合の *a* の相当語句, すなわち zero 冠詞は *a* の複数形式とすると,<sup>15</sup> 次のような例で単に数の違い以上の解釈の違いが生じてしまうが, 複数名詞の場合の *a* の相当語句を *some* とすると解釈の違いは単に数的なものだけである。

(24) (a, b. は Carlson (1977 b : 419-420))

a. Everyone read a book on caterpillars.

b. Everyone read books on caterpillars.

c. Everyone read some books on caterpillars.

(24) a. は, 毛虫についての本が一冊あってその本をみんなが読んだという解釈と, どの人も毛虫についての本をどの本でもとにかく一冊読んだという解釈の2通りがある。一方で(24) b. はどの人も毛虫についての本を2冊以上読んだという解釈があるだけで, それらの本が同じ本であるという解釈は存在しない (Carlson 1977 b : 419-420)。従って(24) a. と(24) b. では可能な解釈の種類が異なる。(24) c. は(24) a. の一冊の本が2冊以上であることという単数-複数の違いがあるだけで, 2種類の解釈が可能であることにはかわりはない。

<sup>14</sup>カテゴリー的な文脈, 数量的な文脈については 2.1.1 Quirk *et al.* (1985)の引用, Christophersen (1939) の引用も参照。

<sup>15</sup>このような見解については Carlson (1977 a : 6-7) が簡潔にまとめている。

これらのことを総合すると *some* を冠詞の体系に取り込むことが必要であり、それにより *some* が他の冠詞と共起できないことや、数量的・具体例的な指示対象をもつ場合は zero 冠詞が不適切であることが明らかになるため、以下のような間違いを防ぐという点で指導上重要である。

- (25) the pages/some pages/\*a some page/\*the some page(s)/the many pages/the few pages  
(26) I visited a museum and some restaurants/ ? restaurants in New York.

次は、Chesterman (1991) が zero 冠詞や null 冠詞などの名称で呼ぶ音形のない冠詞を含めるかどうかである。もし音形のない場合も何らかの冠詞が生起していると考えそれらを含めるとなると、聞こえない・見えないものの存在をどのように立証するのか、また、もし 2 種類を認めるとなるとその区別はどのように行うのが問題になる。

本稿では Chesterman (1991) が提案するように、音形のない冠詞には 2 種類があり、その両方を冠詞の体系に含めるべきであると考え。またそれら 2 種類の冠詞を当面の間 Chesterman にならって zero 冠詞と null 冠詞と呼ぶことにする。従って Jespersen (1949) や Palmer (1939) のような立場、すなわち音形のない冠詞は 1 種類であり (zero 冠詞に相当するもの)、それ以外で名詞の前に音形のある要素が生起していない場合は、いかなる冠詞も生起していない (no article is used) という立場はとらない。

しかし、Chesterman によるこれら 2 種類の冠詞の区別には問題点があることを指摘しなければならない。まず、Chesterman も認めているように、単数可算名詞や固有名には null 冠詞が生起し、複数可算名詞と mass 名詞には zero 冠詞が生起するという分類では、*What kind of cake are you looking for ?* の場合、*cake* の前に生起している冠詞が zero か null かは、*What kind of house are you looking for ?* の *house* の前に zero 冠詞が生起していると判断するほど容易には決定できないということがあげられる (2.1.1 参照)。

次に、表層に現れない冠詞が 2 つあることの証拠として Chesterman があげている「制限的修飾語句を伴う際の容認可能性の違い」が、必ずしも両者を区別する決定的な証拠にはなっていないということである。

(27)~(29) (Chesterman 1991 : 16)

- (27) \*I like London that the tourists see.  
(28) I like the London that the tourists see.  
(29) I like cheese that is made of goat's milk.

Chesterman はこれらの例から、後置制限的修飾句と生起するとき固有名詞の *London* は *the* を必要とし、*cheese* の方は必要としないので、それぞれの名詞の前には別々の冠詞、すなわち null 冠詞と zero 冠詞が生起していることの証拠としている。しかし、

- (30) Cheese (which is) made of goat's milk is incredibly healthy. (Chesterman 1991 : 46)  
(31) \*Cheese I ordered was incredibly healthy.

(32) The cheese I ordered was incredibly healthy.

のように、制限的修飾語がつくと *the* を伴わなければ非文になるのは *London* も *cheese* も同じであり、この構造は必ずしも zero と null を区別する決定的な証拠にはなっていない。

また *in prison* の場合も *prison* は null 冠詞と生起しているとし、*London* の場合と同様に後置制限的修飾節を伴うと非文になることをあげているが、

- (33) a. He spent four years in prison. (彼は4年間服役した。)  
b. \*He spent four years in prison where Fred works. (Chesterman 1991: 47)  
c. He spent four years in the prison where Fred works.  
(彼はフレッドが働いている刑務所で4年間を過ごした。)

(33) b の *prison* は *the* を伴わなければ非文法的であることは確かだが、(33) c のように *the* をつけることによって意味解釈がかわってくる。<sup>16</sup> このような意味解釈の変化は *London* の例では見られない変化であり、Chesterman が述べているように制限的修飾句が後置されることによって容認可能性がなくなる場合は常に同一の冠詞、すなわち null 冠詞が生起していると結論づけることの適切さに疑いを投げかけるものと思われる。

ではどのようにして zero 冠詞と null 冠詞のどちらが生起しているのかを判断するのか。その方法のひとつは、ある名詞句が定名詞句か不定名詞句かを判断するテストである所有の構造 (possessive structure) に求められるのではないかと考える。この構造は主語の位置に定名詞句がくる場合文法的であるので、(34) は *Fido* が定名詞句であり、(35) の *Cheese* は定名詞句ではないことがわかる。

- (34) Fido is John's.  
(35) \*Cheese is John's.

このことは *Fido* と *cheese* は共に音形のない要素が前にあると考えられるが、その要素は同一のものではなく、ここでの用語を用いれば *Fido* は null 冠詞と、*cheese* は zero 冠詞と生起していることになるのである。このテストを用いると、

- (36) \*Prison is John's.

となり、*prison* も *cheese* の場合と同様に定名詞句ではないという点で、*Fido* とは異なった冠詞が生起していることになり *London* の場合にはみられなかった(33) c での *prison* の意味解釈の変化も不可解ではない。

しかしこのテストだけで zero か null かを判断するとなると、呼びかけ語 (address term) である *Come along, boy* や *Yes, father* の *boy, father* も *I like cheese* の *cheese* と同じ zero 冠

<sup>16</sup>ここでは「彼」は必ずしも服役していたとはいえない。例えば「彼」は刑務所の職員で転勤でたまたま *Fred* の働く刑務所に移動し、4年後また別の刑務所に移動したという場合も考えられる。

詞が生起していることになるし、*page three, figure eight* の *page, figure* も zero 冠詞が生起していることになるが、そのことはそれぞれの指示対象に対するネイティブスピーカーの直観と矛盾していると言わざるを得ない。

現時点では zero 冠詞と null 冠詞の区別を形式的に示すテストはないように思われる。さらに、Chesterman が null 冠詞が生起しているとした名詞句の指示対象に対する直観がネイティブスピーカーの間でもゆれがみられることを考えると<sup>17</sup>、音形のない冠詞の区別は Chesterman が分類したよりはずっと複雑でむずかしいものかもしれない。

しかしそうであっても、音形のない冠詞を区別することが指導上無理で意義のないことにはならない。明らかに *I like London* と *I like cheese* の *London* と *cheese* の指示作用は異なっており、またなぜ *take a/the train* というにもかからわず *go by train* なのかという疑問に答えなければならないからである。そのために考えられるのは、典型的に zero 冠詞が生起している名詞句と典型的に null 冠詞が生起している名詞句を出発点として、それぞれの名詞句の指示対象が 1.1.2~1.1.4 で述べた 3 つの対立についてどのような値をとるのかを考察し、そこで得られた結果からもう一度境界線上にある名詞句 (例えば *go to bed, in prison* など) をみていく方法である。そこで 2.2 ではこれら 3 つの対立についてより詳細な検討を試みたいと思う。

## 2.2 冠詞の体系の構造の 3 つの次元

従来の冠詞の研究では、冠詞を定冠詞と不定冠詞に分類し、それぞれの意味を明らかにしていくという方法が採られることが多かった。Hawkins の分析も、定冠詞 *the* が不定冠詞 *a/some* にどのような点で対立し、どのような点で対立していないのかという視点からおこなわれている (Hawkins 1978, 1991)。しかし、冠詞の体系を *a, the* だけではなく *some, zero* 冠詞, null 冠詞を含む 5 つの冠詞からなる体系とすると、それぞれの冠詞は単に定性・不定性という対立によって分類されるだけではなく、Chesterman が指摘するように「それぞれが名詞句に対し別々の意味を課していく」(Chesterman 1991: 2) 要素なのである。したがって、単に *the* と null 冠詞が定冠詞であり定性を標示し、*a, some, zero* 冠詞が不定冠詞であり不定性を標示するという意味付けでは不十分であり、例えば、*a, some, the* が表層に現れない zero 冠詞や null 冠詞に対してどのような対立をしているのかも組み込まなければならないであろう。また冠詞の意味・機能を明らかにしていくにあたって、名詞が単数である場合、*a* はその名詞が count use されていることを示し、*some* と zero 冠詞はその名詞が mass use されていることを示すということも見過ごしてはならない。

### 2.2.1 定性：語用論的集合の存在と包括性

まず冠詞研究の中心であった、定名詞句か不定名詞句かの標示という機能からみていくことにする。例えば、*I saw a man and a woman coming across the street.* の *a man and a woman* は *a* によって不定名詞句であると判断されるし、この文に続く *The man was wearing*

---

<sup>17</sup>例えば *go to bed* について Chesterman は *the* の直接的場面の用法にパラレルな用法としてとらえ、話し手と聞き手が共有する直接的場面の集合の中に *bed* の指示対象が含まれていると考えるが (1991: 66), Reid (1991) は *go to bed* の *bed* は「どのベッドであってもいいのでその上で眠りにつく (*go to sleep on whatever bed*)」と解釈し指示対象は同定されないと考えている (1991: 77)。

*a black coat and the woman was wearing a white coat.* の *the man, the woman* は *the* の存在によって定名詞句であると判断される。このことにより *the* と *a* の意味・機能は定性という概念について対立しているとされている。

しかし冠詞が名詞句の定性に関与していることはわかっても、ある名詞句が定であるということはどういうことなのか、不定であるということはどういうことなのかという問いが残る。直感的に言えば、ある名詞句が定 (definite) であるとは、話し手が用いた名詞句の指示対象を求めて、聞き手が言語内や言語外の情報を駆使してある限定されたものたどり着くことができ、また話し手も聞き手にとってそれが可能であると想定していることであり、不定である (indefinite) とは、その名詞句の指示対象が、聞き手によってそのようには限定されないということである。それでは、「限定する」とはどういうことなのか、そこで駆使される言語内、言語外の情報とはどのようなものなのか。それらによって冠詞の意味はどのように記述されるのか。

冠詞の意味・機能を定・不定の対立によって分析しようとする試みは冠詞研究において数多くなされてきた。その流れを概観することに本稿は立ち入らないが、ここでは冠詞の意味・機能の記述に大きな貢献をしていると考えられる Hawkins (1978, 1991) を取り上げ、その試みを検討してみたいと思う。Hawkins (1978) の研究は大まかに言えば Christophersen (1939) の familiarity 理論の流れの上であって、それを発話行為の理論によってより理論的に洗練させたものと位置づけてよいだろう (Chesterman 1991 : 17 ff.)。Hawkins は *the* を定冠詞、*a, some* を不定冠詞と分類し、自分の研究を「定指示 (definite reference), 不定指示 (indefinite reference) の統一的な語用論的・意味論的理論を提示するもの」(Hawkins 1978 : 11) としている。後の Hawkins (1991) では冠詞の意味論的・語用論的意味の記述の背景となる理論的枠組みがかわるなど変遷が見られるが、定冠詞の用法についての考察は一貫しており、冠詞の意味についての大きな貢献であると考えられる。ここでは、まず Hawkins (1978) の枠組みを、そしてその後で Hawkins (1991) でそれらがどのように修正されたのかを検討し、冠詞の指導の教育内容として取り込むべき点は何かを考えていきたい。

### 2.2.1.1 Hawkins (1978) による定冠詞・不定冠詞の意味論的・語用論的特性

Hawkins (1978) においても Hawkins (1991) においても定名詞句の指示作用がどのようなものであるか、言い換えれば名詞句の指示作用において定冠詞 *the* がどのような意味を担っているかの考察が、不定名詞句の指示作用の考察に先立って行われる。Hawkins (1978) では、冠詞の意味を発話行為の理論によってとらえようとし、定冠詞 *the* は次のような発話行為を遂行しているとする (1978 : 167)。

- (37) a. 指示対象を聞き手に伝える (introduce)。
- b. 聞き手に対し、その指示対象をある共有集合<sup>18</sup>に位置づけることを知らせる (instruct)。
- c. その集合の中で、指示表現を満足する対象物 (objects) や mass の総体を指示 (refer)

<sup>18</sup>共有集合 (shared set) とは、概略、話し手と聞き手が発話の時点で共有している状況における存在物や、共有している、または共有することになる知識(言語的文脈から得た知識や言語外の知識)の集合である。

する。

一方で不定冠詞 *a, some* は次のような発話行為を遂行している (1978 : 186-7)。

- (38) a. 指示対象を聞き手に伝える。  
b. 指示表現の潜在的な指示対象の真部分集合、つまり not-all を指示する。

さらにこれらの発話行為の内容に加え、それぞれの発話行為が適切であるための条件を示している (定の指示表現については 1978 : 167-8, 不定の指示表現については 187)。

それぞれの発話行為を比べてみると、不定冠詞の場合は定冠詞の場合に要求される「話し手と聞き手の共有集合」について言及がない。すなわち不定冠詞は共有集合に位置づけられるかどうかについては中立的であることになる。定冠詞と不定冠詞が対立するのは、前者が (共有集合内の) 総体に対する指示を行う (1978 : 159) のに対して、後者は真部分集合を指示するという、いわば all 対 not all の対立である。これを Hawkins (1978) では、包括的な指示 (inclusiveness) と排除的な指示 (exclusiveness) という用語で表している。

包括的な指示という概念は、「定記述 (definite description) は唯一性を含意する (entail)」という Russell (1905) の唯一性にかわって、単数可算名詞の場合だけでなく複数名詞や mass 名詞と定冠詞が結合している場合も統一的に扱うことのできる、より一般的な概念として導入される (1978 : 157 ff.)。すなわち Russell の唯一性は「定冠詞の意味と (名詞の) 単数性 (singularity) またはひとつであること (oneness) の融合の結果」(1978 : 158) であって、「*the* それ自体としての意味の一部ではあり得ない」(1978 : 158)。定記述 (definite description) が唯一的に指示をしているという直観をより正しく表すのは、定記述の指示が関連する共有集合に存在する対象物や mass の総体 (totality) に対してなされているということを示す inclusiveness の概念であり (1978 : 160), inclusiveness は、「語用論的に限定された数量化領域におけるすべての対象物またはすべての mass に対して指示をするという、定冠詞の特性」(1978 : 161) であり、また全称数量詞と実質的には同じであると Hawkins は考える (1978 : 161-164)。これと意味論的に対立をなすのが exclusiveness, すなわち指示作用が名詞句の記述を満たす対象の真部分集合に対して行われるという概念である (1978 : 186)。定冠詞と不定冠詞は, inclusiveness/exclusiveness という意味論的な側面 (all vs not-all) で対立しているのだと考えている。

また、包括的な指示はあくまでも話し手と聞き手の共有集合の内部の総体に対する指示であるので、共有集合とは何か、どのように話し手と聞き手が共有集合を設定しているのかが問題となる。それについては定冠詞の用法に基づいて、以前に行われた発話によって形成される集合 (previous discourse set),

- (39) Bill was working at a lathe the other day. All of a sudden the machine stopped turning. (Hawkins 1978 : 107)

発話の直接的な状況によって形成される集合 (immediate situation set),

- (40) Pass me the bucket, please. (Hawkins 1978 : 111)

発話のより広範な状況によって形成される集合 (larger situation set),

(41) The Prime Minister has just resigned. (Hawkins 1978 : 116)

ある引き金 (a trigger) となる表現から連想される存在物の集合 (association set),

(42) The man drove past our house in a car. The exhaust fumes were terrible.  
(Hawkins 1978 : 123)

そして同じ名詞句の中にある修飾語句によって設定される定冠詞の用法を許すような状況や連想の集合などを挙げている (1978 : 106 ff.)。

(43) What's wrong with Bill? Oh, the woman he went out with last night was nasty to him. (Hawkins 1978 : 131)

Hawkins (1978) における定冠詞に関する重要な洞察は、Russell の定記述の唯一性に対して 2 つの点でより本質的かつ一般的な記述を提供したことである。1 つはその唯一性は絶対的なものではなく、話し手と聞き手の間に形成される共有集合によって限定される相対的な唯一性であること、もう 1 つは唯一性にかわって包括的指示という用語を用い、問題となっている指示表現を満足する、共有集合の中のすべての対象または mass を指示することであるとしたことである (1978 : 160)。定の概念を共有集合の認定とその中での包括的な指示という 2 つの特性に分析する Hawkins の主張は、Chesterman (1991) での冠詞の体系の統一的な記述の試みの中にも採用されている。

一方で、不定冠詞の意味とする「排他的な指示 (exclusiveness)」に対しては、はたしてそれが定冠詞の「包括的指示」と同じ意味論的なレベルでの対立かどうかについて疑問が投げかけられた (Klein 1980 : 152-3)。Klein (1980) は、不定冠詞の意味論的なレベルでの意味は「存在数量詞」に対応するものであり、「排他的な指示 (exclusiveness)」は Grice の会話の含意の適用の結果ではないかと述べている (1980 : 153)。これは「排他的な指示 (exclusiveness)」に対する重要な指摘であると考えられる。なぜなら、もし「排他的な指示 (exclusiveness)」を不定冠詞の意味論的な意味、すなわちその文が真であるための条件とするならば、次のような場合の説明がつかない。

(44) A : Do you know anything about the tense system of Tiwi?

B : Well, actually, a Ph. D student in our department is currently writing a thesis on it.

(Huddleston 1984 : 252)

(45) She has a good knowledge of English.

(44)はたとえ学部にも Ph. D の学生が二人以上いなくても (排除できる対象が存在しなくても) 真であることにかわりはないし (Huddleston 1984 : 252), (45)は\* *two/several knowledges of English* が非文法的であるにも関わらず当該の文が真であることにかわりはないのである。

- (46) a. What's wrong with Mary? Oh, a man she went out with last night was nasty to her.
- b. What's wrong with Mary? Oh, the man she went out with last night was nasty to her.

Hawkins 自身、(46) a. の例について「意地悪だった」と叙述された以外の人とメアリが昨夜出かけたかどうかについてはわからないのであり、「話し手は(共有集合を設定する)関係詞節を用いる際、定冠詞を使って包括的に指示するのか(46) b.), 不定冠詞を用いて指示が包括的か排他的かに関してコミットしないのか(46) a.) という選択ができる」(1978: 225-6)と述べて、不定冠詞が必ずしも常に排他的な指示を行っているのではないことを認めている。これらのことから、「排他的指示」が不定冠詞の意味論的特性とすることに問題があることは明らかである。

### 2.2.1.2. Hawkins (1991) による定冠詞・不定冠詞の意味論的・語用論的特性

Hawkins (1991) が Hawkins (1978) と大きく違う点のひとつとして、「排他的指示」を不定冠詞の意味論的特性とすることをやめ、不定冠詞は意味論のレベルでは「唯一性」について中立的であるとしたことが挙げられる。このことについて簡単にまとめると以下のようになる。

まず Hawkins (1991) は、Russell (1905) による定記述の論理的翻訳とそれに対応する不定記述の論理的翻訳を比較し、定冠詞は指示対象の存在と唯一性を含意する一方で<sup>19</sup>、不定冠詞は唯一性については中立的であることを示す (1991: 406-7)。定記述である(47)の論理的翻訳は(48)、(47)に対応する不定記述が(49)でその論理的翻訳が(50)である。

- (47) The professor is drunk.
- (48) a.  $\exists x(P(x) \ \& \ \neg \exists y(P(y) \ \& \ x \neq y) \ \& \ D(x))$   
 b. 存在 (Existence) : There is a professor.  
 c. 唯一性 (Uniqueness) : There is only one professor.  
 d. 叙述 (Predication) : This individual is drunk.
- (49) A professor is drunk.
- (50) a.  $\exists x(P(x) \ \& \ D(x))$   
 b. 存在 (Existence) : There is a professor.  
 c. 叙述 (Predication) : This individual is drunk.

(47)~(50)からわかることは、(47)は(49)を含意していること、そして「(49)の文が真であるためには少なくとも (at least) 一人の酔っぱらいの教授がいなくてはいけないということであり、このことはそのような教授が二人以上いてもたった一人しかいなくても矛盾しない。従って(49)は唯一

<sup>19</sup> 「含意する (entail)」とは、文  $x$ ,  $y$  があり、 $x$  が真であれば  $y$  が常に真であり、 $x$  が偽であれば  $y$  がつねに偽となる場合、 $x$  は  $y$  を含意するという。例えば、*I saw a boy.* が真であれば常に *I saw a child* は真、偽であればつねに偽になる。従って *I saw a boy* は *I saw a child* を含意する。

性に対して中立的である」ということである (Hawkins 1991 : 407)。

ここで Hawkins は包括性という用語にかえて「唯一性」という用語を使用するが、Hawkins (1978) で主張したように、Russell の用語である「唯一性」は定冠詞の特性を一般的に表すものではないので、次のように定義を拡大した上で使用すると断っている。Hawkins の「唯一性」は、例えば「*the bridesmaids* のような定冠詞を含む表現が指示する、関連する語用論的集合 (Hawkins (1978) で共有集合と呼ばれていた集合) の中の存在物の唯一最大の集合 (some unique maximal set of entities within a P (ragmatic)-set)」、もしくは与えられた語用論的集合における定記述を満足させる mass の唯一最大量の集合 (a unique maximal amount of mass within a given P-set) に対して指示を行うという意味での唯一的指示なのである (1991 : 410)。この拡大された唯一性の概念は Hawkins (1978) の inclusiveness と同値、従って全称数量詞に対応するものであると考えてよいだろう。この「拡大された唯一性」こそが定冠詞の意味論的特性である (1991 : 410) と Hawkins は主張する。

それに対して不定冠詞の意味論的特徴は、「排他的指示」すなわち不定記述を満足させる存在物の真部分集合を指示することではなく、「少なくともひとつある」という存在数量詞に対応するようなものであって、「(拡大された) 唯一性」に関しては中立的、言い換えれば唯一的に指示をする場合もあり、非唯一的 (non-unique) に指示をする場合もあり、さらに言語内の情報だけではそのどちらかを決定できないこともあるとする (1991 : 407, 416, 430)<sup>20</sup>

ここで次の2つの問いをたててみよう。まずひとつは、定冠詞が含意する唯一性は絶対的な唯一性でないのは明らかであるが、どのような方法で限定されるのか。もう一つの問いは、不定冠詞の唯一性に関する中立性がどのような場合に唯一的に指示をすると解釈され、どのような場合に非唯一的 (non-unique) に指示をすると解釈され、またどの場合に言語内の情報だけではそのどちらであるかは決定できないと解釈されるのかということである。これらの問題に対し Hawkins (1991) では、Grice 及び Levinson (1983, 1987) による言語規約的及び会話の含意の理論によって答えていく。

最初の問いに対しては、次のことを定冠詞が含意していると規定する (1991 : 414)。

##### (5) *The : conventional implicature : P-membership*

*The* は次のことを言語規約的に含意 (conventionally implicate) している。談話の領域 (the universe of discourse) の中に聞き手と話し手の双方に明白な存在物の部分集合 {P} があり、その部分集合の中には定の指示対象 (definite referents) が存在し、かつそれは唯一 (unique) である。

<sup>20</sup>Hawkins (1978) のように *a* の意味を排除性、すなわち *a* を使用するというはその名詞句の指示を満足する対象が必ず他にも存在するとするならば、*a* と生起することが少なくとも2個の同種の対象の存在を前提とすることになり、\*two intelligences という表現が常に可能であることになるが、*a* の意味を名詞句の指示を満足する対象が「少なくともひとつ」存在すると定義することにより、intelligence, education などの名詞が an unusual intelligence, a good education など *a* と生起するにもかかわらず、\*two unusual intelligences, \*many good educations とはならないことも統一した説明の中に入れておくことができる。An unusual intelligence などの an が唯一性について+の値をとっている、すなわちひとつしか存在していない存在物に使用されている *a* であると考えれば、\*two unusual intelligences が存在しないのは当然である。

ここでの聞き手と話し手の双方に明白な存在物の集合とは、Hawkins (1978) が共有集合という用語で表現していた語用論的に設定される集合に他ならない。唯一的に指示をするという意味論的特性が (51) の言語規約的含意によって補完されている (Hawkins 1991: 414), すなわち、唯一性は(51)の{P}の中で定義される唯一性であり、定冠詞の特性として定記述の指示対象が存在する {P} の認定が不可欠であるという主張は Hawkins (1978) から一貫している。

2 番目の問題について Hawkins は、*a, some* の使用が次のようなことを含意していると述べる。ここで Q-implicate とは Levinson (1987) の Q-principle<sup>21</sup> によって含意するということ、I-implicature とは Levinson (1987) の I-principle<sup>22</sup> によって含意するということである。

(52) *A/SOME : Q-implicature : non-uniqueness*

話し手が、*the* を使うことができるのにもかかわらず (If the speaker could use) そう

---

<sup>21</sup>Q-principle (Levinson 1987) とは、

話し手の格率：より強い言明を提供することが I-principle に違反しないのであれば、自らの世界の知識より情報的に弱い言明 (statement) を提供してはならない。

聞き手の推論：話し手は自らが知っていることと一致する最も強い言明を行っているものとみなせ。したがって、もし話し手が A (W) を断定するなら、そして <S, W> が Horn scale を形成するなら (S を断定する (assert) ことが W を断定することを含意する (entail) なら)、強い方の言明が偽であることを話し手は知っているということを推論することができる。(ここで W は Horn scale の右側にある要素、S は左側にある要素である：筆者注)

例えば、(1)の例で *all, some* は Horn scale (Horn 1972) をなしているので(1)a は(1)b を含意する。

- (1) a. Some of my best friends are academics.  
b. Not all of my best friends are academics.

<sup>22</sup>I-principle (Levinson 1987) とは、

話し手の格率：最小限化の格率

必要最小限のことをいいなさい。すなわち、コミュニケーションの目的を達成するに十分で最小限の言語的情報を産出さなさい。(Q-principle を頭に置きつつ)

聞き手の推論：豊富化の規則 (the Enrichment Rule)

最も特定の解釈を見つけることにより、話し手が m-intended しているとあなたが判断するところまで発話の情報内容を増幅しなさい。特に、

(a) (1)当然と思われていることと矛盾していなくて、(2)話し手が冗長な表現を用いることにより最小限化の格率に違反しているのでなければ、指示対象や出来事間に成り立つ典型的な関係を想定しなさい。

(b) 当然と思われていることと一致するなら、文が述べているものの存在や現実性を想定しなさい。

話し手の最小限化の格率は、聞き手の側の推測の最大化を当然の結果としてもつ (Hawkins 1991: 424)。

例えば、(1)a は(1)b を含意する

- (1) a. If you mow the lawn, I'll give you \$5.  
b. If and only if you mow the lawn, I'll give you \$5.

せずに *a/some* を使用するならば、その話し手は non-uniqueness を (conversationally) Q-implicate している。すなわち、不定名詞句の記述を満足し、かつその不定名詞句によって存在が含意される (entail) 個体や個体の集合と同一のものではない存在物が少なくともひとつあるということである。

(53) *A/SOME : I-implicature : P-membership*

話し手と聞き手にとって双方に明白である、談話の世界における存在物の P-set が与えられ、かつその集合内に不定表現の指示対象が存在しているのなら、*a/some* の使用はそれらの指示対象が確かにその P-set の要素であることを含意 (conversationally I-implicate) する。

言い換えれば、(52)は、*the* ではなく *a, some* を使用するということは、名詞句の指示がその記述を満足させる存在物の真部分集合に対してなされているということであり、(53)は、もしなんらかの語用論的集合が文脈や発話の状況から想定され、その集合の中に不定名詞句の指示対象が存在しているのなら、それらが指示対象であると解釈せよということである。(52)、(53)はどちらも不定名詞句が非唯一的に解釈される場合を述べている。これらの2つの含意には適用される順序があり、Q-implicature の適用が優先され、それが適用されない場合、もしくは適用された後で I-implicature が適用される (Hawkins 1991 : 429-30)。

(52)の適用の条件である「*the* が使えるにもかかわらず」とはどのようなことなのか、具体例に即して明らかにしていこう (例文は Hawkins 1991 418-419 から)。

- (54) a. I didn't buy the house because a window was broken.  
b. I didn't buy the house because a roof was leaking.  
c. I didn't buy the house because some windows were broken.
- (55) a. I met some students before class. A student came to see me after class as well.  
b. I met a student before class. A student came to see me after class as well.

(54)b, c (55)b の場合、*the roof, the windows, the student* とするとそれぞれ *the roof of the house, the windows of the house, the student I met before class* と解釈され、*the house* の連想物の集合、直前に行った会話の集合という語用論的な集合の内部のすべての *roof, window, student* を指示することになる。しかしそうすることができるのに *the* を使わず *a, some* を使ったということは、唯一的な指示はしない、いいかえれば唯一的な指示ができない状況でこの発話を行っているということであり、唯一的な指示ができない状況とは *roof, window, student* という記述を満足する存在物が他にも存在しているような状況を意味する。そのため非唯一性が含意されるのである。非唯一的な解釈をもつとすると *a roof*, (55) b. の *a student* の場合はその時点で話し手聞き手が共有している語用論的集合の内部で指示対象を見つけることはできないので<sup>23</sup>、非唯一性の2次的な帰結として、指示対象は語用論的集合の中になく、すなわち、指示対象は今共有している語用論的集合の外にあるということも含意することになる。

(54) c の場合は *the house* の連想物の集合の中に *window* という記述を満足する存在物は複数存在するのがふつうなので、*some windows* はその語用論的集合の内部でも外においても非唯

一的な指示が可能であるが、ふつうは(53)の含意によって *the house* の連想物という語用論的集合内の存在物として解釈される。

(54) a, (55) a の場合 *a window, a student* のかわりに *the window, the student* を使用することは(51)の含意に反することになりできない。従って(52)は適用されない。従って、唯一性に関しては中立的、すなわち存在数量詞が対応するような表現「ある窓、ある学生」という解釈となるが、「関連する語用論的集合があるならば、その内部で解釈した方が聞き手にとってより制限され情報量の多い解釈が得られるので」(Hawkins 1991: 427), (53)によってその語用論的集合の要素であると解釈される。

(56) I met a professor. (Hawkins 1991: 417)

(57) I just saw a unicorn. (Hawkins 1991: 430)

(58) A movie that Mary was watching last night was really interesting. (Hawkins 1991: 422)

(56)は *the* を使用することもできないし、関連する語用論的集合も想定され得ないので(52)(53)の会話の含意は適用されない。このような例では *a professor* は唯一性に関しては全く中立的である。しかし、「世界の知識 (knowledge of the world) によってこれらの名詞句の解釈は非唯一的であるという方向へむかうのがふつうである」(Hawkins 1991: 430)。一方でその世界の知識は(57)の *a unicorn* や(58)の *a movie that Mary was watching last night* を *a professor* の場合の時のようには非唯一的解釈へと方向付けないため、*a unicorn, a movie* はひとつであるかもしれないし、2つ以上かもしれない。従って中立性がよりはっきりと現れるケースであると Hawkins は考える (Hawkins 1991: 422, 430)。

このように不定冠詞の意味論的特性の「唯一性に関する中立性」が非唯一的解釈をもつ事実を、Hawkins (1991) は会話の含意によって得られる場合と、たとえ中立的であっても世界の知識という言語外の要因によってより豊かな解釈を与えられる場合とした。

不定冠詞の意味論的特性を「唯一性に関して中立的」とすることは、排除性とした場合の問題点を解決し、不定冠詞の意味の本質的な記述により近づくものであると考える。しかし冠詞の指導に取り込んでいくにはいくつかの問題点も残されている。まず第一に、「唯一性」という用語が冠詞のこのような意味を表わす的確な用語なのかどうかということである。名詞句の記述を満足する存在物の、語用論的集合内での唯一最大の集合というように意味を拡大しても「唯一性」という用語のもつ「たったひとつ」という印象がぬぐいさらられるのかどうか。まして冠詞の指導という観点からこの概念を考えるならば、たとえその語を定義しなおしたとしても混同しやすい用語はさけるべきである。むしろこの概念は「与えられた語用論的集合内にあり、名詞句の記述を満足する存在物や mass の総体を指示する」(Hawkins 1991: 409) ことを表すのであるから、「総体への指示 (totality)」「包括的な指示 (inclusiveness)」もしくは「すべてを

<sup>23</sup> *The house* の連想物の集合の中には通常屋根はひとつしかないと考えられているし、*student I met before class* はひとりだけであるので、どちらの語用論的集合の中にも指示対象となるべき存在物はひとつだけで、その語用論的集合の中に指示対象を見いだそうとすると唯一的な指示を行ってしまうことになる。

指示する (all)」という用語を用いるのが適切ではないかと考える。それに対して、唯一性に関して中立的な場合は存在数量詞によって表される「少なくともひとつの」、また非唯一性の方向に解釈されている場合は「真部分集合への指示」(not-all) や「同種の別の存在」のような用語で表す方が適切なのではないか。

第2の問題として、Hawkins は(58)のような例を「メアリが昨夜見た映画が他にもあったのかどうかは曖昧なので…唯一性についての中立性がよりはっきりと現れる」(1991: 422) としているが、この場合なぜ(52)の Q-implicature が適用されないのかが不明のままである。これをどう考えるのか。さらに Hawkins は全く言及していないことだが、唯一性についての中立性は(58)及び前出の(44)の例の場合、唯一性を重要な情報とは考えないなどのため表現しないという話者の意図が働いていると考えられる (Huddleston 1984: 252)。それを Hawkins による会話の含意をもちいた不定冠詞の使用の定式化にどのように組み込んでいくのかという課題もある。

最後に Hawkins は考察の対象を *the*, *a*, *some* に限定し、なおかつそれらの指示的表現に限定している<sup>24</sup>。これは Hawkins が定性を論ずる際に Chesterman のいう数量的な文脈で使用される冠詞 (1991: 56) に限定したということである。しかし本稿では、冠詞の体系の構成要素は *the*, *a*, *some*, zero 冠詞, null 冠詞の5つという立場をとるので、Hawkins の定・不定に関する対立が zero, null 冠詞にどのように拡大されていくのかも論じなければならない。そのためには Hawkins (1978) の枠組みを原則的に採用してこれら5つの冠詞の意味を論じた Chesterman (1991) をみる必要がある。

### 2.2.1.3 Chesterman (1991) による5つの冠詞の分析

Chesterman (1991) は定性をいくつかの素性の複合体であるという立場から *a*, *some*, *the*, zero, null 冠詞の5つの冠詞を分析している (1991: 1)。Hawkins (1978) と Guillaume の枠組みに基づいて、locatability (共有集合—2.2.1.2 で述べた語用論的集合と同じ概念なのでこれからは語用論的集合と言い換えて用いる—への位置づけ可能性) と inclusiveness (包括性)、及び extensivity (指示対象の範囲) についてそれぞれの冠詞は±の値をもち、それらの値の違いがそれぞれの冠詞の意味の違いとなっていると考えるのである (Chesterman 1991: 2)。Extensivity については2.2.2 で検討することにして、ここでは locatability と inclusiveness についてそれぞれの冠詞がどのような値をとっているかを Chesterman (1991: 68) の(59)の表にそって見ていく。

(59)	Locatable	Inclusive
zero	—	±
some	±	—
a	±	—
the	+	+
null	+	+

<sup>24</sup>指示的表現 (referring expressions) に限定しているということは、*She is a teacher. の a teacher* などを考察の対象に含めていないということを意味している。

Hawkins (1978) を基礎としていることから語用論的集合に位置づけ可能かどうかについては、*some*、*a* が中立的であり±の値をとっていること、*the* が+の値をとっていることは2.2.1.1 でみたとおりである。Zero 冠詞が-の値をもつことは以下の例から明らかになる。

- (60) a. \*Fred lost fingers/hair in the war.  
b. Fred lost millions/money in the war.  
c. Oil floats on water.

(60) a. での *fingers/hair* という名詞句の指示対象は *Fred* に関連する連想物という語用論的集合に位置づけられる対象物と解釈されなければならないが、*fingers/hair* という形式がそのような対象物を指示できないため(60) a は非文法的となる。一方で(60) b、(60) c. の *millions/money*、*oil*、*water* はどの語用論的集合の要素でもなく従って文法的である。このことから zero 冠詞は locatability について常に-の値をとる (Chesterman 1991 : 65)。

固有名 (*John*、*London* など) の場合はまさに名前であるという事実によって話し手と聞き手に共通の経験という語用論的集合に位置づけられるため、そこに生起している null 冠詞は locatability について+の値をとる (1991 : 65)。

- (61) a. Come along, boy; Yes, father.  
b. He went by train. He is at church.  
c. Breakfast is ready. / Go to bed.

(61) a の *boy*、*father* は名前に匹敵するので話し手と聞き手に共通の経験という語用論的集合に位置づけられ、(61) b の *train*、*church* は聞き手がもっていると話し手が想定する交通手段や制度についての知識 (familiarity) という広汎な状況の集合 (larger situation set) に類似する語用論的集合に位置づけられ、(61) c の *breakfast*、*bed* は直接の場面という語用論的集合に位置づけられるので、null 冠詞は Locatability について+の値をもつと Chesterman は考える (Chesterman 1991 : 65-66)。

包括性についてのそれぞれの冠詞の値は、Hawkins (1978) では2.2.2.1 で述べたように *a*、*some* は包括性と対立する排除性という意味をもっているとされていたので、ここでは当然-の値をとることになる。一方で zero 冠詞は包括的な指示をすることもあつし、排除的な指示をすることもあり、その値は±となっている。その理由は、

- (62) (Chesterman 1991 : 76)  
a. Insects have six legs.  
b. Dogs are friendly creatures.  
c. There are scratches on the window.

(62) a ではすべての *insects* を指示するが、(62) b では必ずしもすべての *dogs* を指示しているわけではなく、(62) c は *scratches* によって指示されていない *scratches* もあり (Chesterman 1991 : 77)、zero 冠詞を含む名詞句の指示が包括的かどうかは文脈によって決定されるとする (Ches-

terman 1991 : 68)。

包括性についての null 冠詞の値は+で、例えば固有名である *John* の指示対象の集合は *John* 一人からなる集合であるし、*by train, in prison* の *train, prison* の指示対象はそれぞれすべての *trains, prisons* から構成される抽象的な制度 (abstract institution) として理解されるという点で包括的な指示をしていると考えるのである (Chesterman 1991 : 68)。

Chesterman の分析の重要な点は、zero 冠詞が常に語用論的集合に位置づけられず、包括性に関しては中立的という値をとって Hawkins の枠組みに組み込まれることを示している点である。A, *some* の包括性の値については、本稿では Hawkins (1991) の枠組みに依拠し中立的という立場をとるので(59)の表は±と修正される。

Null 冠詞と生起している典型的な例である *John* や *yes, father* の *father* に関しては、語用論的集合に位置づけ可能でかつ包括的な指示をするという特性をもつことに異論はない。しかしそのような特性が *Breakfast is ready, by train, go to bed, in prison* の *breakfast, train, bed, prison* にもあてはまるとしているのははたしてそうだろうか。むしろ *train* や *prison* はすべての *train, prison* から構成される一般的な概念であるという点で包括的な指示をしてはいるが(従って包括性に関する値は+)、いかなる語用論的集合にも位置づけられないため(語用論的集合に関する値は-)、null 冠詞ではなく zero 冠詞が生起していると考えすることはできないだろうか。また *bed* はあらゆる *bed* からなる抽象的概念というよりも少なくともひとつの *bed* を指示し(従って包括性に関する値は±)、しかしいかなる場合も語用論的集合に属さない(語用論的集合に関する値は-) (Reid 1991) ため、zero 冠詞が生起していると考えすることはできないだろうか。2.1.2 で述べたように、null 冠詞が生起する環境を形式的に決定するのではなく、3つの対立でどのような値を典型的な null 冠詞がとるのかによって判断してみるという課題に立ち戻ると、位置づけ可能性と包括性という素性の組み合わせから考察するかぎりにおいて、Chesterman によって null 冠詞と生起しているとされていた用法のうち、ほんとうに null 冠詞と生起しているのは固有名とそれに匹敵する呼びかけ語や *page three, figure eight* のような表現だけとすることができるかもしれない。

#### 2.2.1.4 包括性と語用論的集合への位置づけ可能性という素性から構成される定性

Hawkins (1991) では、*a, some* と *the* の対立は「語用論的集合の有無」ではなく「唯一性」についてであり、Chesterman (1991) によって zero 冠詞も *the*、null 冠詞に対して唯一性という点で対立していることが示された。両者の研究から *a, some, zero* 冠詞の3つが *the*、null 冠詞に対し「唯一性」という特性について異なった値をもっていること、「唯一性」は話し手と聞き手が共有する語用論的集合によって限定される相対的な概念であること、またこのような語用論的集合の有無に関して *a, some* と zero 冠詞のとる値が異なっていることが明らかになった。これらのことが冠詞の指導に示唆することは、1) 従来定冠詞・不定冠詞という2つの対立する概念であった定性が、少なくとも「唯一性」(本稿ではこの用語ではなく「包括性」または「totality への指示」がこの概念を表すのにより適切だと主張している) 及び「語用論的集合の有無」という2つの概念によって教えられなければならないこと、2) (59)の表のそれぞれの値を教えることによってはじめて個々の冠詞の定性の次元での意味を教えたことになること、3) しかもその値が+と-の2つではなく、±も含む3種類であり、特に *a, some, zero* 冠詞の

値は土が多く、語用論的含意や文脈、われわれが持っている世界の知識などによって多様な意味解釈が予測されるということであろう。

## 2.2.2 カテゴリ的な指示と数量的指示

1.1.3 で英語学習者によくみられる間違いとして(9)に言及した。

(9) A : I hear that you went to New York. What did you do there ?

B : I visited a museum and ? restaurants/some restaurants.

この場合 *a museum*, *some restaurants* は適格であるが、zero 冠詞と生起する *restaurants* の形式は容認可能性に疑いがある。このような例に見られる *a*, *some* や zero 冠詞の違いをどうとらえたらよいのだろうか。

表層に現れる冠詞と表層に現れない冠詞(音形のない冠詞)の違いに注目し、Christophersen (1939) は冠詞に関する現実化の理論 (the theory of actualization) を提案した。Christophersen は「ゼロの形式を持つ連続体名詞 (continuate words) はその連続的な対象物に関する一般的な概念を表している…同じことが (ゼロの形式を持つ) 複数についても当てはまる…そのような単語を使用するときほどのようなものであれ明確な境界 (precise limits) という考えは頭に浮かばない。数量的な限定 (quantitative limitation) という考えは全くないのである」(Christophersen 1939 : 73, Chesterman 1991 : 28 からの引用) と述べている。すなわち、*cake* という形式は、*a cake*, *the cake* という形式に対して「単に概念の名前かそれとも現実のものを指示するか」という点で対立しているとするのである (2.1.1 Christophersen の部分を参照)。

Chesterman は Christophersen による洞察を、*a*, *the* そしてゼロの形式だけではなく、表層に現れる冠詞 (*a*, *some*, *the*) と表層に現れない冠詞 (zero, null 冠詞) に適用範囲を拡大した上で、G. Guillaume の用語を用い「指示対象として含めることができる範囲 (extensivity)」の次元での区別とし (Chesterman 1991 : 27), 両者はこの extensivity について異なっていると考えた (1991 : 28)。例えば先ほどの Christophersen の CAKE の例を取り上げれば、zero 冠詞が生起している *I like cake.* の *cake* の場合その指示対象は無限といってよい<sup>25</sup> 言い換えれば「指示対象として含めることができる範囲 (extensivity)」に制限がないのである。一方で *a cake*, *the cake*, *some cake* は指示対象の範囲がどれぐらいとは特定できなくとも数量的に限定されている。すなわち「指示対象として含めることができる範囲 (extensivity)」に制限がある。このように zero 冠詞は *a*, *some*, *the* に対して extensivity の点で対立している。

このことから(9)の例を考えると *restaurants* の方は zero 冠詞が生起しているため指示対象として含めることができる範囲に制限がない。そのため *I visited* という文脈に適合しないが、*some restaurants* という数量的に限定された表現であれば適格となる。前出(15)の例も extensivity の対立から *melons* の容認可能性の疑いが説明される。

---

<sup>25</sup> *cake* という指示表現は、今世界に存在している *cake* だけではなく過去に存在した *cake* も未来に存在するであろう *cake* も指示することができる。従って指示作用を最大限に行えばその指示対象は無限である。

(63) (15)に *the melon* を加えた)

- a. I've just bought a melon/some melons/the melon.
- b. ?I've just bought melons.

(63) b の容認可能性に ? がつくのは, *melons* が zero 冠詞を伴っているためその指示表現によって指示可能な指示対象が無限であることを意味するが, そのような指示表現は *I've just bought* という文脈とは適合しない。したがって容認可能性に疑いがあるとされる。一方で(63)a の *a melon/some melons/the melon* はいずれも *a, some, the* を伴うことによって指示対象の範囲に数量的限定が想定されるため(63)の文脈に適合し文法的であると判断される。

Zero 冠詞がもつ extensivity に制限がないという特性から, Chesterman は zero 冠詞を含む指示表現はその指示対象の集合の名前であると考え (1991 : 70 ff.)。これは複数名詞がその前に何も伴わずに名詞句を構成している場合 (bare plural NPs) それらの名詞句は種類の固有名 (the names of kinds of things) として機能するという Carlson の主張 (Carlson 1977 a : 59) に依拠している。Chesterman は, Carlson のいう種類 (kind) が Chesterman の指示対象の集合 (referent sets), もしくは Quirk *et al.* (1985 : 275) のカテゴリーに相当し, zero 冠詞を伴う名詞はその指示対象の集合を名付けるもの (Chesterman 1991 : 72) として扱うことができると主張する。その特徴が顕著に現れる例として次の例をあげている。

(64) (Chesterman 1991 : 72)

- a. It/This is bran.
- b. They/Those are zebras.

(64) a . b . の構造の機能は, 「指示されている存在物がどのクラスもしくは集合に属するかを明示的に述べることであり」 (Chesterman 1991 : 72), この場合 *It/This, They/Those* などの代名詞によって指示されている存在物は, {bran} {zebras} という集合, すなわち bran, zebras と名付けられた集合の部分や要素であると定義されている。

(63)の例に戻ると, (63) b の *melons* は {melons} という集合の名前またはカテゴリーそのものであって, それゆえ(65)のようにカテゴリー的な文脈では zero 冠詞が文法的になる (Chesterman 1991 : 56, Quirk *et al.* 1985 : 275)。

(65) I've just bought melons, not lemons.

一方で *a melon, some melons, the melon* のように *a, some, the* が生起している場合は, {melons} という集合のある要素や部分集合 (Chesterman 1991 : 70), 言い換えればそのカテゴリーの具体例を指示しているのである。

ここで zero 冠詞の extensivity の次元における値と定性の次元での inclusiveness という素性についての値の関係についてみておこう。Zero 冠詞は extensivity に制限がないため, zero 冠詞を伴う名詞句が最大の範囲で指示をする場合は, その名詞句を満足する指示対象すべてからなる集合そのものを指示していることになるが, 必ずしも常にその集合の要素すべてを指示しているというわけではない。

(66) (Chesterman 1991 : 76)

Insects have six legs.

の *insects* が {insects} という集合を名付けることによって、種全体を指示しているのに対し、

(67) (Chesterman 1991 : 76)

Dogs are friendly creatures.

の *dogs* は、その集合を名付けることにより種全体をひとまとめに (collectively) に指示しているが、その指示は必ずしもその集合の一つ一つの要素に対してまんべんなく (distributively) 行われているわけではなく、従って最大の指示範囲よりは少ない範囲で指示している (Chesterman 1991 : 76)。

(68) (Chesterman 1991 : 38)

Italians make fine furniture.

での *Italians* はイタリア人というカテゴリーを指示しているが、イタリア人全員に言及しているわけではない。むしろイタリア人の部分集合、すなわちイタリア人の家具職人を指示している (Chesterman 1991 : 38) と考えられるだろう。

では null 冠詞の場合は extensivity について制限はあるのだろうか。Chesterman は null 冠詞も zero 冠詞と同様 extensivity に制限がないという特性をもつとする。その理由は、Carlson が Postal (1969) に言及して述べている zero+複数名詞と固有名との類似性にもとめられる。

(69) (Carlson 1977 a : 60) (Chesterman 1991 : 73 も同じ例を Postal (1969) から引用。)

a. Slim is so-called because of his slender build.

b. Cardinals are so-called because of their colour.

Null 冠詞と生起している固有名は要素がひとつの集合を名付けているとみなすことができるので (Chesterman 1991 : 72-3), null 冠詞も zero 冠詞と同様 extensivity に制限がないと考えられる。

Extensivity が制限されているかどうかについての各冠詞の値を、一部修正した(59)の表に加えると次のようになる。

(70)	Locatable	Inclusive	limited extensivity
zero	—	±	—
some	±	±	+
a	±	±	+
the	+	+	+
null	+	+	—

表層に現れる冠詞と現れない冠詞がこのように extensivity について対立しているとする  
ことにより、次のような言語現象の解明にも光が当てられる。(71)では KNOWLEDGE は *a* と生起す  
るが zero 冠詞とは生起できない。

(71) She has a knowledge of English/\*knowledge of English.

これは *of English* という補部により知識の対象が明示されるため、「彼女がもつほかの知識と  
は区別され」(Huddleston 1984: 248), 従って knowledge というカテゴリーに限定が加えられ  
たとみなされる。このように境界を設定された knowledge はもはやカテゴリーではないため  
zero 冠詞が不適格となりそれにかわって数量的な限定を示す *a* が使用されるのである。

しかし何についての知識かをあらわす補部を伴うことにより、常にカテゴリー的指示から数  
量的指示へとかわるわけではない。

(72) Knowledge of the world/\*a knowledge of the world will generally enrich these  
interpretations in the direction of non-uniqueness. (Hawkins 1991: 430)

(72)では *of the world* という補部を伴っているにも関わらず、*a* は非文法的であり zero 冠詞が  
使用される。指示しようとする対象がカテゴリーとみなされるほど一般的なものか、それとも  
その具体例のひとつとみなすべきかは、名詞がどのような語句と生起しているかに依存すると  
考えられる。(71)の例からわかるように、*a knowledge of English* は *of English* という補部  
によりその知識の対象が英語であることが示され、それによって境界をもつひとかたまりの知識  
とみなされて knowledge というカテゴリーの具体例をなるが、*knowledge of the world* は *of  
the world* という補部によって知識の対象が実在世界であることが明示されていても、それで  
はまだ他の知識とは区別される境界をもつ知識として十分限定されたものではないと考えら  
れ、*a* は生起しない。

このように冠詞の使い分けによって、話し手は聞き手に、ある概念をカテゴリーそのものと  
みなしているのか、それともその中のある一例とみなしているのかを伝えているのである。し  
かしどの場合を十分な限定と考えるのかは意味論的にも語用論的にもまだ一般化はなされてい  
ない。冠詞の指導をしていく上でもこのことは課題となるだろう。

2.2.1.3 で取り上げた *by train*, *at church* のような例を extensivity についてみてみるとど  
うなるだろうか。これらの例では表層に現れない冠詞、すなわち zero 冠詞か null 冠詞のどちら  
かが生起していて、本稿では Chesterman とは異なり zero 冠詞が生起しているのではないかと  
考えていることを 2.2.1.3 で述べた。しかしどちらの冠詞であっても extensivity に関して  
は同じ特徴をもつので、extensivity の点から *train*, *church* の前に生起している冠詞が zero か  
null かということを決定することはできない。そこで視点を変えて、もし extensivity に制限が  
なく、カテゴリーとしての *train*, *church* を指示するのなら、もう一つ別の形式 *trains*, *churches*  
が可能であるはずなのに<sup>26</sup>、なぜ *train*, *church* という単数の形式なのかという問いをたててみ  
よう。

---

<sup>26</sup>Carlson (1977 a) の bare plural NPs の形式である。

通常名詞が複数形式で生起している場合は、その名詞が個別的な存在を指示しているという解釈をもつ (Huddleston 1984 : 246)。従って名詞の方に注目すれば *trains*, *churches* の場合「個々の列車」「個々の教会」が少なくとも 2 つ以上存在していると解釈される。*Shake hands* や *change trains* などの表現で \**shake hand*, \**change train* が非文法的であるのも、「握手する少なくとも 2 本の手」「乗り換える前と後の少なくとも 2 台の列車」を想定しているからである。このことから *trains*, *churches* は zero 冠詞と生起しているということで *train*, *church* というカテゴリーを指示することが可能であると同時に、そのカテゴリーが個々の *trains*, *churches* から構成される集合であることが示されていることになる。一方で *He traveled by train*, *She is at church* というときに少なくとも 2 つのという想定はなく、そのためそのような想定を前提とする *trains*, *churches* を避け、もう一つのカテゴリーを指示する表現 *train*, *church* が選択されるのではないかと考えられる。しかし、これは推論の域をはず、今後冠詞や名詞の研究が進むにつれてより明らかにされなければならないことであろう。

### 2.2.3 名詞の count use/mass use の標示としての冠詞

ある名詞が count として使用されているのか、mass として使用されているのかは共起している限定詞の種類やその名詞の数によって決定される (Huddleston 1984 : 246)。本稿で冠詞としている 5 つの要素のうち、名詞の count use/mass use の決定に関与するのは *a*, *some*, zero 冠詞の 3 つである。それらのうち *some* と zero 冠詞は名詞の数が単数の時 count/mass の決定に関与し、そのどちらも名詞が mass use されていることを示す。一方で *a* は count use されていることを示す。*Some*, zero 冠詞ともに複数形式の名詞とも共起するが、その際は count/mass の決定には *some*, zero 冠詞自体ではなく、複数形式が関与している。

- (75) a. I used to have a lamb.  
 b. I had some lamb for dinner.
- (76) a. This is a very special honey.  
 b. I like honey.

(75) a. は *lamb* が count use されており「動物としての子羊」という意味解釈をもつものに対し、(75) b. は *lamb* が mass use され「子羊の肉」と解釈されることを *a* と *some* がそれぞれ示している。同様に、(76) a. は *a* によって *honey* が count use されていることが示され、意味解釈は「ある特別な種類のハチミツ」となり、(76) b. は mass use されていることが示され「一般にハチミツというもの」という意味解釈となる。(75)の語彙素 LAMB が count として使用されるときは動物そのものの形をもつものと解釈され、mass として使用されるときはその中身・質料である肉と解釈されたり、(76)の語彙素 HONEY が mass として使用されるときはかたまりとしてのハチミツであり、count として使用されるときはその種類を問題にしていると解釈されるのは名詞の count/mass の区別に関する一般的意味解釈の規則によるものであって、冠詞の特性が関与しているのではない。しかし冠詞は count/mass の区別の標示として機能している。従って count か mass かという区別も冠詞の意味を構成するひとつの次元とみなし、count という素性についてそれぞれの冠詞は土の値をもつと考えることができる。この素性を(70)の表に組み込むと次

のようになる。但し、null 冠詞については、null 冠詞を固有名と呼びかけ語の前に生起する音形のない冠詞とした場合の値を標示している。また zero 冠詞と *some* の値は名詞が単数か複数かによって異なり、単数の場合－、複数の場合＋という値をとるので、表の上では±としてある。

(77)	Locatable	Inclusive	limited extensivity	count
zero	－	±	－	±
some	±	±	＋	±
a	±	±	＋	＋
the	＋	＋	＋	±
null	＋	＋	－	＋

以上、5つの冠詞を3つの次元によって分析してきた。定性の次元では locatability と inclusiveness という2つの素性に分解することによって従来定冠詞、不定冠詞という単純な2分法によって分類されてきた冠詞の意味の違いをより明確に記述できることを示した。また extensivity の次元では制限された extensivity という素性に対してとる値により指示対象がカテゴリ－そのものであるかそのカテゴリ－の中の部分集合や具体例であるかの違いが示されること、count/mass の次元では名詞が count として使用されているか mass として使用されているかを標示することをみた。それぞれの冠詞の意味はそれらが4つの素性に対してとる値を総合したものであり、(77)の表から5つの冠詞はそれぞれ異なった意味をもっていることが明らかになる。この表で明らかにされた冠詞の意味こそが冠詞の指導の教育内容に含まれなければならない冠詞の意味なのである。

## おわりに

本稿で行ってきた冠詞に関する言語学的考察に基づき、冠詞の指導のための教育内容を構成し順序構造を明らかにしていくわけであるが、その際重要なことは、1) 冠詞の体系の構成要素として、表層に現れる *a*, *some*, *the* と表層に現れない zero, null 冠詞の5つを含めること、2) それぞれの冠詞は3つの次元でそれぞれの素性についてある値をとること、3) その値は＋と－だけではなく±も含む3つの値であること、4) ±の場合どちらの値をとるのかは語用論的要因や言語外の要因によって決定される場合があること、5) それぞれの値の組み合わせが冠詞の意味となること、6) その冠詞の意味によって名詞句の指示対象の特性が明示されていることである。

これらのことを教育内容に含めるとして、今後検討すべき課題として次のことが挙げられる。まず、冠詞の体系の3つの次元のどの次元が他の次元に先だって指導されるべきかということである。3つの対立が一緒になってひとつの指示作用を実現しているのであるから、そのひとつを取り出してみても名詞句の指示作用が解読できるわけではないが、3つをすべて一度に教えることは不可能である。それぞれの対立の指導がどのような順序構造になるべきかが明らかにされなければならない。

次に、表層に現れない冠詞の区別をどうするか。2.2.1.3 で述べたように null 冠詞を固有名と呼びかけ語に限定することが、言語現象全般にわたって一貫した区別になるのかどうかをさらに検討しなければならない。

また、言語理論的にまだ十分明示的説明がなされていない問題や言語外の要素も関与していると思われる場合、例えばどのような限定が数量的指示のための十分な限定とされるのかという問題 (2.2.2) や語用論的集合がどのように形成されるのかという問題 (2.2.1) にどのように取り組んでいくのかもこれからの検討事項となるであろう。

最後に名詞句の構造と機能の指導全体における冠詞の指導の位置付けをどうするかという問題がある。冠詞の指導の前提として何が学習されていなければならないかを明確にしておくべきであろう。現時点では、単数・複数や count/mass の区別が教えられた後体系的な冠詞の指導を行うべきと考えるが、これも検討すべき課題である。

これらのことを引き続き検討し、冠詞指導の教育内容及びその順序構造を確定した上で、指導プランの作成につなげていかなければならない。

#### 参考文献

- Carlson, G. N. (1977a) *Reference to Kinds in English*. Ph. D. dissertation, University of Massachusetts at Amherst. Published by the Garland series Outstanding Dissertations in Linguistics. ed. by J. Hankamer. New York: Garland Publishing Company. 1980. from which we cite.
- \_\_\_\_\_. (1977b) A unified analysis of the English bare plural. *Linguistics and Philosophy* 1 (1-2): 413-456.
- Chesterman, A. (1991) *On definiteness: A study with special reference to English and Finnish*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Christophersen, P. (1939) *The articles. A study of their theory and use in English*. Copenhagen: Munksgaard.
- Hawkins, J. (1978) *Definiteness and indefiniteness. A study in reference and grammaticality prediction*. London: Croom Helm.
- \_\_\_\_\_. (1991) On (in)definite articles: implicatures and (un) grammaticality prediction. *Journal of Linguistics* 27: 405-442.
- Horn, L. R. ((1972) *On the Semantic Properties of the Logical Operators in English*. Mimeo. Indiana University Linguistics Club.
- Huddleston, R. 984) *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. (1977) *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge MA.: The MIT Press.
- Jespersen, O. (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. London: Allen and Urwin.
- Klein, E. (1980) Locating the articles. *Linguistics* 18: 147-157.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- \_\_\_\_\_. (1987) Pragmatics and the grammar of anaphora: a partial pragmatic reduction of binding and control phenomena. *Journal of Linguistics* 23: 379-434.
- Lyons, C.G. (1980) The meaning of the English definite article. In Van der Auwera (ed.), *The semantics of determiners*, 81-95. London: Croom Helm.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大竹政美 (1988) 「外国語教育における“言語活動”の下位区分」, 『教授学の探究』第6号, pp. 91-102.
- \_\_\_\_\_. (1989) 「コミュニケーション文法としての教育英文法—英語の態への適用」, 『北海道大学教育学部紀要』52号, pp. 129-144.
- Palmer, H. E. (1939) *A grammar of spoken English on a strictly phonetic basis*. Cambridge: Heffer.
- Postal, P. M. (1969) Anaphoric islands. In R. I. Binnick, A. Davison, G. M. Green and J. L. Morgan

- (eds.), *Papers from the fifth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp 205–39. Chicago : University of Chicago.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Russell, B. (1905) On denoting. *Mind* 14 : 476–93.
- Reid, W. (1991) *Verb and Noun Number in English : A Functional Explanation*. London : Longman.
- Yotsukura, S. (1970) *The articles in English : a structural analysis of usage*. The Hague : Mouton.